



～ 学校便り～

なつめ 10月号

〈編集・発行〉
鹿児島市立喜入小学校
〈発行日〉
令和2年10月23日



かまどの火で飯盒炊飯

「適度に不自由だったのがよかった」

校長 内村 英人

10月13日(火)～15日(木)の三日間、5年生は市少年自然の家で宿泊学習を行いました。

テントを張って寝床をつくり、カレーライスをつくり、洗い物をするといった普段の生活とは違って、すべてを自分たちで行うという生活。しかも、普段の便利さ

がないために手間暇のかかってしまう作業を、集団の規律や時間を守りながら行うという時間は、不自由さから何を学ぶかという時間でもありました。

「適度に不自由だったのが、よかったのかもしれない。」

これは、日本の固体燃料ロケット開発に携わってきた科学者たちの言葉です。日本のロケット開発の歴史は、世界の常識に挑戦してきた歴史です。ロケット開発が緒に就いた頃、飛行するロケットの状態をレーダーで観測する技術がなければロケットはつukれないというのが世界の常識でした。しかし、当時、日本は予算や設備、社会情勢等の制約からレーダーがありませんでした。それでも、「レーダーがなくてもロケットはつukることができる」と、世界の常識に挑戦しロケット開発を行いました。また、日本初の人工衛星「おおすみ」の打ち上げ(1970年)は、「人工衛星の打ち上げは、誘導装置がなければできない」という世界の常識への挑戦でした。誘導装置なしで地球の周回軌道に「おおすみ」を乗せることに成功した驚くべきプロジェクトだったのです。近年では、人工知能を搭載したモバイル管制のロケットの開発にチャレンジし、イプシロンを開発。当初冷ややかだった世界の科学者たちを驚かせました。

「なぜ、これだけのことを実現できたのですか。」という質問に対する科学者の答えが、「適度に不自由だったこと」なのです。不自由であるがゆえに創意工夫が必要であり、創意工夫しチャレンジすることの原動力となったのが「夢をもつこと」だったのです。

以前、イプシロン初号機の開発プロジェクトマネージャーであった森田泰弘氏とお話をさせていただいたときに、サインをいただきました。そのサインの横に添えてくださった言葉は「夢を大切に」でした。

予測不可能と言われるこれからの社会に生きる子どもたちにとって、「夢をもつこと」や「適度に不自由な中で問題を解決する経験」は、とても大切なことではないかと思うのです。GIGAスクール構想の昨今ですが、不自由さに挑戦する教育について少しばかり考えています。

【本年度の一事徹底事項】「元気なあいさつ」

気候がよくなってきたせいもあるのでしょうか。元気ある気持ちのいいあいさつをする子どもが増えてきました。「元気な声」は6割、「立ち止まっておじぎ」も6割、「自分から進んで」は8割の子どもたちができるようになっていると感じます。特に、1・2年生のあいさつの仕方がよくなってきました。道ですれ違う地域の方にも進んであいさつができるようになってくるともっていいですね。御家庭や地域でも引き続き、声かけをお願いします。

抵抗力を高めましょう (十分な睡眠 適度な運動 バランスのとれた食事)